

地域に密着した JICAの窓口

私は大学で教員資格を取った後、大学院でグローバル教育を学びました。大学院在学中に市民団体「ふくいグローバルネットワーク」を立ち上げ、開発教育・国際理解教育に関するワークショップや学習会なども手掛けました。修了後は高校で教える傍ら、NPO同士の協働を支援する組織で活動。その後、青年海外協力隊としてケニアのリマンドホーム（少年拘置所）に2年5カ月間派遣され、帰国後の2016年12月から、滋賀県の国際協力推進員として活動中です。

国際協力推進員は、基本的に各県に1人ずつ配属されるJICAの窓口。地域の人々と開発途上国をつなぐことが役割だともいえます。JICAによる出前講座やイベントなどを通して国際協力に貢献できる人材を育成することに加えて、人材や技術など“地域の強み”を見出し、それを途上国での課題解決に役立てるのが、業務の大きな目的です。ボランティア事業の広報や相談対応、中小企業や自治体などに対す



国際協力推進員

山本 康夫さん

JICA関西国際センター 市民参加協力課
(配置先：公益財団法人 滋賀県国際協会)

るJICA事業の紹介なども手掛けています。

私は大学院生のころからJICAの国際協力推進員と交流があり、一緒にセミナーなどを実施したこともあります。推進員の皆さんは、それぞれの経験を生かした独自の視点から意見を聞かせてくれるので、いつも感銘を受けていました。協力隊から帰国後、教育と国際協力の両方に関わっていきたくて仕事をしたいと考えた私にとって、国際協力推進員はぴったりの仕事だったのです。

滋賀県では、JICAボランティア経験者による

出前講座の他、滋賀県国際協会との共催で年2回の開発教育指導者研修、滋賀県出身JICAボランティアのパネル展、県内で開催される国際交流イベントへのブース出展などを行っています。多くの人と関わって実感するのは、直接会って自分の言葉で話すことが、互いの理解を深める最良の手段だということ。開発課題が「遠いどこかの誰かの話」ではなく、自分にも関係する身近な課題であると感じ、解決に向けて行動してもらえるように、これからも学びの場をつくっていきたくと思います。



大学教授

菊地 太郎さん

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授
長崎大学国際連携研究戦略本部 教授

大学と世界をつなぐ

私は2001年に国際協力事業団（現JICA）に就職して以来、保健医療分野を中心に担当し、ザンビアやチュニジアの事務所での勤務も経験してきました。昨年10月からは長崎大学に転任して、大学院の熱帯医学・グローバルヘルス研究科で教員を務めています。

長崎大学は、戦後、日本でいち早くアフリカなど熱帯地域でのマラリアや黄熱などの対策に乗り出した大学であり、日本における最先端

かつ高度な感染症研究拠点です。この研究科には、政府開発援助（ODA）を通じてアジアとアフリカ地域を中心とする開発途上国から多くの留学生が来ており、すべての授業が英語で行われています。私の担当科目では、開発援助の概要から、昨今の国際保健の動向や日本の保健医療協力の実例まで、幅広いテーマを扱っています。また、修士課程の必修科目であるフィールド研修やインターンシップについても、

研究科の留学生たちと。菊地さんは日本人学部生の授業も担当している。「学部生には国際協力をより身近に感じてもらえるよう、青年海外協力隊やNGO活動の経験者を招いて、草の根レベルでの国際協力について伝える機会を増やしていこうと思います」

履修生の指導教官と協力しながら準備と実施をサポートしています。

この他、大学の国際連携研究戦略本部がJICAから受託している保健医療分野の研修員受け入れ事業のコースリーダーも、年間3コース程度務めています。途上国の保健医療課題やニーズを踏まえた研修計画を提案できるのがJICA出向者の強みです。教育・研究機関として専門知識を伝えるだけでなく、本学の有する県内ネットワークを生かして、地元長崎の国立病院から地域の診療所、県の地方保健行政、医療従事者を育成する県内団体まで、さまざまな機関の協力の下、多様な保健医療ニーズに対応した研修を企画・運営しています。

本学の研究経験や技術は、エボラウイルス病対策などの世界の保健医療課題の解決に不可欠だと認識されています。日本の近代医学発祥の地であり、歴史的に国際保健医療に貢献してきた本学で、同分野の人材育成に携われることを誇りに思います。



国際協力の仕事というと海外を連想しがちだが、開発途上国から研修員を招いて日本で研修を実施したり、国際協力に関する教育や啓発を行ったりすることもJICAの重要な役割だ。国内でJICA事業を支える人々の仕事をのぞいてみよう。

JICA事業を支える仕事

国内で

福岡県で行われた研修で、廃棄物管理技術について説明する原田さん



研修監理員

原田 由紀さん

JICA九州を拠点に研修監理員として活動中

研修員を身近で支える

私は、JICA九州が設立された1989年から研修監理員を務めています。工業技術や環境分野を中心としたJICA九州のさまざまな研修に同行し、各国からの研修員を引率するとともに、通訳や理解促進の支援、日本での生活に関する助言などを行っています。

研修監理員は単に通訳をする仕事だと思われることもありますが、専門性が高い分野の場合は、事前に勉強して知識を身に付けます。その上で、英語が母国語でない人にも分かりやすい言葉を選んだり、日本ならではの考え方や慣習など、海外の人にとって理解するのが難しそうなのは補足説明を加えたりしています。研修員から「その分野の専門家ですか」と聞かれるのは、何よりの褒め言葉です。

研修監理員の他にも、研修員の募集・人選を担うJICAの現地事務所や国内拠点、研修を企画するコースリーダー、講師など、研修はさまざまな関係者のチームワークがあって初めて成り立ちます。その中でも、研修に最初から最後まで同行する私は、研修員に最も近い存在です。彼らの言葉の端々や姿勢に意識を傾け、研修内容が開発途上国の現状に即しているのかなどを考えながら、より良い研修になるように努力しています。

長年の業務の中で、さまざまな国の研修員



日本を好きになってもらうため、研修の間には観光名所も案内。研修員全員でお好み焼きを食べるのが恒例だという

とのつながりができました。東日本大震災のときには、過去の研修員たちからメールで心配の声がたくさん届き、感激したことを覚えています。また、最近感じているのが過去と現在の研修の違いです。研修監理員になった当初は、研修員の母国と日本との技術や知識の差が大きく、日本が教えるというアプローチでした。しかし、アジア諸国の経済発展や情報技術の普及などに伴い、各国の技術や知識も向上しており、今では研修員同士の情報共有や気付きの場となったり、日本が研修員から学ぶことがあったりと、研修の持つ可能性が広がっています。私は、そんな新しい知見を生み出すための“触媒”としての役割を担っていきたくと思います。